特集をふりかえって

森 川 展 男

東亜大学　総合人間・文化学部　紀要編集委員長

E-mail: morikawa@po.cc.toua-u.ac.jp

室生犀星の『性に目覚める頃』は明治末期の金沢を舞台に10代の若者たちの純愛を描いた小説である。主人公「私」は17歳。文学をこよなく愛する少年で、多少不良がかってはいるが、寺を守る父の影響もあって純朴に育っている。寺によくお参りに来るお茶屋の娘「お玉さん」に恋いこがれ、体に熱いものを感じる。「私」は少女に淡い恋心を抱いているが、相手にその気持ちを伝えられない。偶然彼女が賽銭箱から金銭を盗むのを見た「私」は父の懐中からちょいと失礼し賽銭箱に戻しておく。彼女がまた賽銭泥棒をすると考え「あなたの行為は見られています。二度としないように」と書いた手紙を賽銭箱に入れておく。それは「私」の「お玉さん」への警告であると共に、好きな人への<恋慕>の表現でもある。益々少女への思いが高じ、彼女の家の玄関に脱ぎ捨てられた、紅い緒の雪駄を片方盗み出してしまう。雪駄に残った少女の温もりを肌で感じる。自分の恋心をそうしてでも確認し、自分が来たことを間接に伝われば と思う「私」は純粋無垢。

携帯電話やパソコンを使って必要なメッセージを伝えるのが流行りのご時世に、こうした「私」と「お玉さん」のようなラブストーリーはじれったいかもしれない。現代はスピードの時代。メールのやりとりで必要な情報が交換される。ラブ・レターなんぞ過去の遺物とさえなった。メールで交わされる文字に〈好き〉や〈嫌い〉の表現もあるだろうが、この小説の「私」のごとく遠まわしではない。「私」が「お玉さん」への恋心を感じるのに、時間の流れとともにある〈ときめき〉や〈不安〉を現代の若者は体験することが少なくなってしまった。道具が目的となったのはさびしい。

すべてが即物的になり〈出会い〉と〈別れ〉がいとも容易に繰り返される。お互いの気持ちを伝えるのに数分とかからない。〈時代が変わった〉と、一言で済ましてしまえばそれまでだが、「人間」の基本的な生活の営みはそれほど変化しているわけではない。コミュニケーションの道具としての電話が本来の役割から逸脱し、相手の電話を待ちわびる寂しい男女の心の空白を埋める道具となっている。「人間」がことばを道具に相手に意志を伝えることは当然であろうが、ことばだけでなく、〈表情〉も大切な媒体になる。〈楽しそうな〉〈悲しそうな〉〈怒ったような〉顔も心の中にあることばである。道具は〈表情〉を現してくれないが、〈表情〉は想像力を呼び起こしてくれる。こうした現象を社会の変化として終わらせるのは性急であろう。

昨今10代の子供たちが暴れている。犯罪行為に及ぶことも多くなった。評論家のごとく親たちはその責任を社会にのみ求める。とりわけ、政治の荒廃、経済の破綻、学校の無力と責め立てるが、果たして、そうであろうか。社会だけが悪いのであろうか。確かに、社会の影響は見過ごせない点ではある。年若い子を持つ親が子供から妊娠を告げられたとき「堕しなさい」と言うのはよく耳にすることである。非難に近いものもある。子供の行く末を心配してのことばであろう。しかしながら、その親が日頃はテレビや新聞で取り上げられる大人の子供への虐待や殺傷事件に接し「どうして、あんな小さな子供の命を奪うのか」とか「命の尊さを知らないやつや」さらに「親の資格もない」と〈命〉の尊さを声高に主張している。こうした親の大半がいわゆる「団塊の世代」の親であることが悲しい。当時かれらは体制に反旗を掲げ平和と自由を訴え、「命の尊さ」を守る運動をしてきた人たちである。

時とともに人は変わるのか。人間の尊厳や愛を求め青春を送った世代が自分の子供の問題と

なると、本音と建前を使い分ける。この姿を見た子供はどう感じるであろうか。これまで築いてきた親と子との信頼が崩れ去ることは想像に難くない。「団塊の世代」が懸命に働き作り上げた繁栄と平和が〈虚構の繁栄〉〈幻想の平和〉であってはいけない。

子供たちの反乱がこうした大人たちへの無言の抵抗であったとしても不思議なことではない。これは家庭に対する不信のみならず、自分の利益を第一と考える政治家、経済が唯一と投機に走る人たち、学校という聖域で安穏と暮らす先生たちへの子供たちの失望であり反抗ではないだろうか。

山口県が生んだ詩人中原中也が次のような詩を書き残している。

汚れちまった悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れちまった悲しみに
今日も風さへ吹きすぎる

汚れちまった悲しみは
たとえば狐の革裘
汚れちまった悲しみは
小雪のかかってちぢこまる

汚れちまった悲しみは
なにのぞむなくねがふなく
汚れちまった悲しみは
倦怠のうちに死を夢む

汚れちまった悲しみに
いたいたしくも怖気づき
汚れちまった悲しみに
なすところもなく日は暮れる……

中原中也は恋人である長谷川泰子と若き血潮を燃え上がらせ京都から東京へ転々と恋の逃避行をした。だが東京で文学の仲間であった小林秀雄に泰子はひかれ、秀雄の子を生むことになる。自分を捨て秀雄のところへはしった泰子から秀雄との間にできた子の名づけ親になることを頼まれ、喜んで引き受ける。

人を愛することは自分がたとえどのような状況に追い込まれようとも変わらぬものであろう。中原中也の詩にある〈汚れちまった悲しみ〉〈死を夢む〉は絶望の淵に立たされた人間が発する魂の究極の叫び声であろう。一筋の光明を求め、必死で生きようとする姿がことば＝詩となり読むひとに感動を与えるのであろう。人間が一たび生を受け、その生をまっとうする過程には悲しみや喜びが交互に訪れる。

室生犀星も中原中也も純粋に人を愛することの大切さを知っていた人たちであろう。たとえ中也のように愛が報われなくても、愛した泰子に対する優しさは消え去ることはなかった。

20世紀がおわり、新しい世紀に入った。20世紀は諸々の意味で〈対立〉の世紀でもあった。人間を自己対他者の〈対立パラダイム〉で捉える価値観が数え切れない悲劇をもたらした。大きくは国家間、民族間の対立、小さくは学校内、家庭内での対立、男女の対立などあらゆる場、関りの中で対立構造が作り上げられた。人間は社会的動物だと言われている。現代を生きるわれわれは、文明社会(＝科学技術社会)の提供する便益な部分のみを受け入れ生きてはいないか。〈生きること〉と〈生活すること〉は異なった意味があるのではないだろうか。人間が成長し、大人になる時、他人に対して同様自分にも優しさと慈しみを持って接しられるため、社会が本当の意味で〈豊かな社会〉でなければならない。

社会の中で生きていこうとする人たちに社会で生活できる処世術を教える書物が書店のベストセラーコーナーに並べられているのは異様ともいえる風景である。

心の豊かさは人との対話を通じ醸成され、すばらしい名作に触れて練磨されていく。科学文明の進歩は生活を便利、豊かにしてくれた。これは紛れも無く人間にとって恩恵である。しかしながら、この進歩がもたらした恩恵を人間の目的にしてはいけない。属性に依拠するのでなく、人間の本性を大切にする社会を築いていくため、古今の叡智を集め、次の世代に伝えていくことがわれわれの責務である。

その意味から東亜大学総合人間・文化学部の各研究室は有機的に関わり合い、「人間科学」の研究と実践が出来うる場である。創刊号特集としてとりあげた「新しい人間科学の確立を目指して」がその一歩になることを期待してやまない。